様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３２７８

研究課題名（和文）身分階層制における日常倫理の人類学的探究：現代ミクロネシアの首長制を事例に

研究課題名（英文）An Anthropological Exploration of Ordinary Ethics in a Hierarchical Society: The Case of Contemporary Micronesian Chiefdoms

研究代表者
河野　正治（Masaharu, Kawano）

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：２０８０２６４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ミクロネシア連邦ポーンペイ島を対象とし、在地に生きる人びとが自らの振る舞いを「より善い」実践へと洗練させるプロセス、すなわち、日常倫理（＝住民による「より善い」実践の日常的な探求）の様相を検討した。コロナ禍を理由とする調査地の国境閉鎖により実地調査こそ叶わなかったが、文献資料及び過去の調査資料を分析することによって、この課題に対する一定程度の知見を獲得することができた。具体的な研究結果として、１）儀礼的な相互行為の場の秩序を保つために住民たちが複数的な価値の間で「判断」を行使すること、２）奇抜な食物展示など、代替的な儀礼実践の模索を通して、より善い価値を追求することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
オセアニア島嶼部に特有な身分階層制（首長制）に関する人類学的研究は、植民地化や市場経済の浸透といった外在的な変化との相互作用として階層性を捉える方向性と、儀礼や祭宴といった具体的な実践の場から階層制の構築プロセスを解明する方向性に大別される。本研究は、階層制の内在的な変化を捉えることで後者の研究を発展させる狙いから、個々の住民が階層制のもとで自らの振る舞いを「より善い」実践へと洗練させるプロセス、すなわち、日常倫理（＝住民による「より善い」実践の日常的な探求）の様相を検討することにより、身分階層制の内在的変化を明らかにし、当該領域の発展を図るものである。

研究成果の概要（英文）：Focusing upon “Ordinary Ethics” in human life (i.e., the ubiquitous exploration for “better” conditions by local residents), I examined how people transform their own behavior into “better” practices in a Micronesian hierarchical society. Initially, I had planned to conduct fieldwork in Pohnpei, the main island in the Federated States of Micronesia (FSM), but had to abandon it owing to the national border closure of the FSM as a result of the COVID-19 pandemic. Instead, I was able to approach this issue by analyzing the ethnographic materials and my past survey data. The specific findings of my study revealed that the Pohnpeians often judge what kind of value is “better” among multiple values to maintain and create interactional order in various kinds of ceremonial feastings, and that they make these values visible through their own alternative practices, such as unconventional display of foods.

研究分野：文化人類学

キーワード：日常倫理　再帰性　身分階層制　首長制　ミクロネシア　ポーンペイ島

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

太平洋島嶼地域の身分階層制をめぐる 1990 年代頃からの人類学的研究は、異文化を閉じた静的な存在物として表象することが本質主義的な態度であるという批判に応えるべく、階層制という伝統に縛られた非西洋人という像から、階層制のなかにあっても可変的な現実を生きる主体という像へと視点を転換した。具体的には、植民地化や国家建設という脈絡に身分階層制を位置づけるポスト植民地研究と、対面的コミュニケーションにおける階層制の構築プロセスに着目する儀礼研究という 2 つの流れが隆盛し、それぞれに研究が進展した。これらの研究はそれぞれマクロな観点とミクロな観点から同時代における身分階層制のリアリティに迫るものであったが、後者には身分階層制の内在的な変化を捉える視点が欠けているという課題があった。

他方で、2010 年代以降の人類学においては、モラルと倫理の人類学が台頭し、なかでも日常倫理という主題をめぐる研究が進展した。日常倫理とは、専門家によるメジャーな倫理〔学〕に対して、普通の人々によるマイナーな倫理〔学〕を指す用語である。そこでは、住民自身が「より善い生」に向けて新たな基準を実践的に練り上げていく再帰的な探求のプロセスが重視される。このアプローチは、住民自身の実践の創造的で再帰的な変化を対象とするため、身分階層制の内在的な変化を理解するにあたっても一定の有効性を期待させるものであったが、本研究開始時点では取り組まれていない主題であった。

２．研究の目的

そこで、本研究では、首長を頂点とする身分階層社会として知られるミクロネシア連邦ポーンペイ島を対象とし、「より善い」生や実践をめぐる再帰的な探求プロセスとして住民たちの日常的・儀礼的実践を捉えなおすことにより、身分階層制の現状をめぐって多様な志向が交錯する複雑な様相を生活の現場から掬い上げることを目的とした。本研究は、その作業を通じて、さまざまな変化の方向性を潜在させる営みとして身分階層制の実践を再定義し、内在的な変化を備えた身分階層制という像を提示するという意義を有する。

３．研究の方法

当初、本研究ではミクロネシア連邦ポーンペイ島における複数回のフィールドワークを実施し、当該地域における日常倫理の様態を解明するための民族誌的資料を収集する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により 2020 年 1 月から 2022 年 7 月までミクロネシア連邦が国境を閉鎖していたこと、国境再開直前の 2022 年 7 月末以降に大規模な市中感染が発生したことから、本プロジェクトの遂行にあたりフィールドワークの実施を断念せざるを得なかった。

代替的な研究方法として、研究代表者自身の過去のフィールドワークにもとづく民族誌的資料、インターネット等で公開されている情報、当該地域を対象にした既刊の民族誌などを資料として採用し、そこから得られる事例を分析することにより、当該地域における日常倫理の様相に接近した。具体的には、日常的に実施されるカヴァ飲みの機会、首長が臨席する冠婚葬祭などの儀礼的な機会、１年に１回に催される「村の祭宴」の実施方法にかかわる資料を取り上げた。

４．研究成果

本研究の成果は、主に以下３点に集約される。

(1) 日常的な場における複数モラルをめぐる判断

日常的な場における日常倫理のあり方を検討するために、日常的になされているカヴァ飲みの事例を取り上げた。その検討から、カヴァ飲みのコミュニケーションにおいて、ポーンペイ島民が高位者の「名誉」を重んじる振る舞いをしつつも、すべての参加者に行き渡らせるという平等主義的な価値観、サブスタンスの共有に基礎づけられる健康観といった複数の異なる基準のあいだで判断を行使していることが明らかになった。すなわち、日常的なカヴァ飲みの場は単層的なモラルによって支えられているのではなく、むしろ複数のモラルの交錯状況のなかに置かれており、そのなかで「より善い」コミュニケーションのあり方が模索される。

(2) 儀礼的な場における複数モラルをめぐる判断

儀礼と日常が完全には区別されえないという観点から、冠婚葬祭をはじめとする儀礼的実践についても検討を行った。その検討から、儀礼的な場においては、日常的な場以上に高位者「名誉」にもとづく振る舞いが道徳的に要請されるものの、そこでは年長者への配慮をすべきという論理や、親族との親密な関係性を優先する価値観といった複数の異なるモラルが交錯する。儀礼参加者は、とりわけ儀礼財の再分配的な実践において、複数モラルの調停に向けた「より善い」

やり取りをその都度判断している。

（3）価値創造的な実践を支える倫理的実践

本研究では、より創造的な倫理的実践の可能性についても検討した。具体的には、儀礼時になされた特異な食物展示の事例に着目した。そこでは、ヤムイモという単一の農作物を展示するという通常の手続きを超えて、多種類の農作物が展示されることにより、展示されたヤムイモの数量による威信の表明から、多品目の農作物の提示による新たな感性の表明へという価値転換が生じていた。これは「より善い」食物展示に向けたブリコラージュ的な実践であるが、新たなモラルの基準を打ち立てるという点で創造的な倫理的行為といえるものである。

以上の検討から、本研究全体としては、身分階層秩序の維持に直接寄与する「名誉」という単一のモラルに社会生活が覆いつくされているわけではなく、むしろ個々の状況において「名誉」と、それとは必ずしも共約可能な関係にない複数モラルとのあいだで判断する島民の倫理的実践の諸相が明らかになったといえる。

ただし、新型コロナウイルス感染症の影響により実現しなかったフィールドワーク型調査を、上記の方法で完全に代替できたとは言い難い。今後は、本研究期間で得た知見を今後の調査研究に援用し、論文投稿や研究発表につなげることにより、当該研究領域のさらなる発展に寄与したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 河野正治	４．巻 48
２．論文標題 食物展示の意味をずらす技法：ミクロネシア・ポーンペイ島の儀礼実践にみる価値転換と創造の萌芽	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会人類学年報	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河野正治	４．巻 135
２．論文標題 フロンティアとしての島嶼世界：海域アジア・オセアニア研究のための予備的検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本オセアニア学会NEWSLETTER	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 河野正治・奥田梨絵	４．巻 135
２．論文標題 ミクロネシア連邦にみる新型コロナウイルス感染症の流行と対策：国境再開までの軌跡と２年遅れの「第一波」を中心に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本オセアニア学会NEWSLETTER	６．最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 河野正治	４．巻 518(2)
２．論文標題 それでも野外調査を見据えるということ―人類学的感性を育み続けるために	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河野正治	4．巻 27
2．論文標題 首長に負うこと、負わないこと：ミクロネシア連邦ポーンペイ島にみる称号と負目（巻頭特集「デット－「負債／負目」研究の最前線）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 フィールドプラス	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 河野 正治	4．巻 85
2．論文標題 序（特集：歓待の人類学）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 042～055
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.85.1_042	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ギリッシュ・ダスワニ（石田慎一郎 河野正治 共訳）	4．巻 517-2
2．論文標題 「ゴッド・イズ・グッド」：ガーナにおける汚職とそのペンテコステ派教会による見せかけ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人文学報	6．最初と最後の頁 030～050
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 河野正治
2．発表標題 権威ある首長でも、権威なき首長でもなく：負債の人類学からのリーダーシップ論再考
3．学会等名 日本文化人類学会第５６回研究大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 フロンティアとしての島嶼世界：ミクロネシアにみる異質な人々の馴化・交錯・並存
３．学会等名 海域アジア・オセアニアプロジェクト 東京都立大学拠点 キックオフミーティング
４．発表年 2022年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 ポーンペイ島の儀礼経済にみる「負うこと」の多元性と延伸可能性：負債の再脈絡化に向けて
３．学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究(2)―人間経済における負債の多元性、相克、創造性」2022年度第3回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 趣旨説明（悩めるフィールドワーカー～マニュアル化できない知恵の領域～）
３．学会等名 東京都立大学フィールドワーク・リサーチ・ラボ部局間交流シンポジウム５「悩めるフィールドワーカー～マニュアル化できない知恵の領域～」
４．発表年 2023年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 祭宴の「仕事」と取り繕われた成果―ミクロネシア・ポーンペイ島の首長制にみる権威・労働・評価
３．学会等名 日本文化人類学会・第55回研究大会（於：オンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 首長に負うこと、負わないこと―ミクロネシア連邦ポーンペイ島にみる称号と負目
３．学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　『フィールドプラス』カフェ「デット―「負債／負目」研究の最前線」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 趣旨説明―人類学的な歓待論の今日的な意義をめぐって
３．学会等名 日本文化人類学会課題研究懇談会「歓待の人類学」2021年度第1回研究会（於：オンライン開催）
４．発表年 2022年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 歓待の掟でも、敵意の歓待でもなく―ミクロネシア・ポーンペイ島の応接実践にみる自他関係の底流
３．学会等名 日本文化人類学会課題研究懇談会「歓待の人類学」2021年度第1回研究会（於：オンライン開催）
４．発表年 2022年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 西洋人との出会いをルーツとする親族集団―ミクロネシア・ポーンペイ島の系譜語りにみる19世紀の他者接触とその真実性
３．学会等名 第39回日本オセアニア学会研究大会（於：オンライン開催）
４．発表年 2022年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 首長の「ご意向」と島民の「仕事」：ミクロネシア・ポーンペイ島にみる伝統的権威と解釈労働
３．学会等名 第906回東京都立大学・首都大学東京社会人類学研究会（於：オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 歓待のエスノグラフィ：他者への関係づけをめぐる人類学的考察（分科会・趣旨説明）
３．学会等名 日本文化人類学会・第54回研究大会（於：オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 称号の負い目を想起する：ミクロネシア・ポーンペイ島における首長制と祭宴の事例から
３．学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」（負債研）2020年度第１回研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 「外来の人」を始祖とする人々：ミクロネシア・ポーンペイ島における他者接触の歴史と親族関係の想起
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」
４．発表年 2020年

１．発表者名 河野正治
２．発表標題 それでも野外調査に備えるということ：フィールドを見据えた課題探索の意義
３．学会等名 東京都立大学部局間交流シンポジウム３「新型コロナ時代におけるフィールドワークのいま、そしてこれから」
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 大坪玲子、谷憲一	４．発行年 2022年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 424
３．書名 嗜好品から見える社会	

１．著者名 風間計博、梅崎昌裕	４．発行年 2020年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 304
３．書名 オセアニアで学ぶ人類学	

１．著者名 Gaku Kajimaru,Caitlin Coker and Kazuhiro Kazama	４．発行年 2021年
２．出版社 Trans Pacific Press Co., Ltd. and Kyoto University Press	５．総ページ数 204
３．書名 An Anthropology of Ba: Place and Performance Co-emeging	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
https://researchmap.jp/kawanomasaharu

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関